



昔の吾妻町山車

吾妻町は漁師町のため、燈籠山人形を飾らなくなった後、大漁旗を掲げていました。

吾妻町から飯田町の中心部までは橋を通らなければならず、若山川下流に位置する吾妻橋を避け、川を横断している様子です。

海に入った歴史があるため、地山部分の劣化が激しく、近年修理されています。



歴史と文化が今も色褪せない町

祭りの由来と歴史

燈籠山祭りは能登半島最先端の珠洲市飯田町に鎮座する春日神社の祭礼で、その起源は江戸時代の寛永年間初期（一六二五年頃）に遡ります。神事としては「おすすみ祭り」と呼ばれております。

春日神社では、7月19日に前夜祭、20日に本祭並びに神輿渡御、燈籠山巡行の神事、21日には氏子全域への燈籠山巡行が斎行されます。社伝によれば、寛永年間の初期、土用入りの暑さがはなはだしい頃に、春日神社の御祭神「天兒屋根命」をはじめ七柱の神々に夕涼みにお出まし願ったのが始まりとされています。

往時、氏子の人々は高張提灯やデンガク燈籠に灯りをもとして大勢賑やかに供奉して神社への送迎をしたと伝えられています。このデンガク燈籠が時代とともに絢爛豪華に発展し、現在の曳山、いわゆる燈籠山と言われる巨大な山車となりました。この祭りが「燈籠山祭り」とも言われる由縁です。この祭りでの神様の渡御は、一般的な普通の神輿ではなく、神輿と呼ばれる白木造りの台車に六尺程度の櫓を立て、それを神籠としてお出ましになります。その巡行経路も春秋の大祭のように氏子区域全体をまわる形式ではありません。海岸近くに御飯屋を設営し、そこを御旅所として夕刻に渡御、そして御旅所での神事が行われます。この神事の中で、必ず大祓詞を奏上することになっています。これが「おすすみ祭り」の特徴を最も表している点で、海辺へのお出ましと大祓詞奏上、まさに神様と氏子の親・祓なのです。この「おすすみ祭り」は神様の夕涼みという側面だけでなく、根底には祓・祓の信仰が根付いた祭りであり、罪・穢をお祓いする神事を行っているのです。このような慣わしは能登半島の多くの神社でおこなわれており、6月晦日の大祓が行われない理由がここにあります。

※大祓は6月晦日と12月大晦日の年2回行われる古来よりの神社の儀式です。



明治初期以降の飯田町燈籠山祭り

当時飯田町は7町内からなり、7基すべてが燈籠山でした。兵隊など、軍事色の濃い人形も飾られたりと、その時代の世相を反映した人形題材であったようです。この頃は人形評議審査がなされ、順位が発表されるなど見物人の楽しみとなっていました。各町内は競い合い、からくりで作動するものも作られたと伝えられています。大正時代に入ると、町内の電線架設に伴い、燈籠山はその高さを制限されることとなり、屋台と地山を残し姿を消すこととなります。屋台と地山だけとなった曳山は、その屋根に開いた穴を隠すように、竹で作った桜の花飾りがつけられたり、下ろした人形を曳山の前に飾ったりと、燈籠山を惜しみながらの祭りでありましたが、時代とともに人形も作られなくなります。その代わりに、曳山の前に舞台を組んでの踊りが興じられ、子ども踊りがより盛んになっていきました。

